

読書運 第45号 動通信

特集:ライトノベルの現在

紹介:私の好きな児童文学~第6回

お知らせ:創作コンクール、ザ・表現!作品募集

発行:フェリス女学院大学附属図書館

読書運動プロジェクト

2007年9月30日

作者が、いわゆる大人向けの作品を発表して高い評価を得ている現在、ライトノベルの魅力をのぞいてみましょう。
(図書館事務室)

★『塩の街 wish on my precious』有川浩 著 メディアワークス 電撃文庫

所蔵なし 発注中

この作品は『図書館戦争』シリーズで有名な、有川浩の処女作である。私は以前、この著者の『図書館戦争』『図書館内乱』を読み、作風がとても気に入っていた。だから地元図書館でこの本を見かけたとき、とても興味をそそられた。

舞台は「人間が塩になってしまふ」という「塩害」が発生した近未来の日本。物語の中心人物である二人の男女、秋庭と真奈は、塩害によって崩壊しかけた東京に住んでいる。真奈には両親がいない。そして彼女には「見なくてもよいものまで見てしまふ」性格故か、犬や猫、果ては人間まで拾ってくるという癖があった。そんな彼女が暴漢に襲われかけたところを助けてくれたのが、秋庭だ。様々な人が、二人の前をまるで走馬灯のように過ぎる。そしてある日、二人の元を訪れた人物によって、話は大きく展開していく。

物語後半に登場する航空自衛隊や米軍基地の描写、塩害の正体、そして塩害によって崩壊した社会のなかでさらけ出される人間の本性など、随所に有川浩らしさを見ることができ、この作品が彼女の原点なのだと、感じさせられる。

彼女の作品はどれも架空の近未来世界が舞台となっているが、そこにはSFのような超科学兵器が存在するわけでもなければ、ファンタジーのように魔法が存在するわけでもない。彼女の作品に描かれるのは、自分の信念や大切なもののために一所懸命がんばる、格好悪くも真っ直ぐな、等身大の「人間」である。英雄のように強いわけではなく、超人的な力をもっているわけでもない。臆病で時に馬鹿なほど正直で、目先の欲に惑わされることさえある。そんな「ただの人間」である登場人物たちが、大切なもののために自分の出来ることを、ほんの少し勇気を振り絞ってやってみる。自分にとっては世界

はじめに

試験やレポートも無事に終わり、さあ、夏休み、バイトに遊びに、サークル活動、就職活動、と忙しく充実した毎日をおくっていたのもつかの間、後期がスタートしました。今年は何年以上の猛暑となり、体調を崩された方も多いのではないのでしょうか。一〇月の声を聞いたというのに、まだまだ暑さ厳しく今日、涼しい図書館は絶好の避暑地ですね。でも、図書館でオカタイ「文学」を読むのはちよつと……という方のために、今号の特集は軽く読めるライトノベルです。
(日文三年 矢島陽南子)

特集 ライトノベルの現在

毎月膨大なタイトルが出版されているライトノベル。主なターゲットはヤングアダルトといわれる中高生ではありますが、いまや読者は小学生から団塊の世代まで。一体何がこれほどまでに私達を引きつけるのでしょうか。児童書とも関わりが深く、またその

よりも大切なもの、愛するものを守るために。その「等身大の人間」のがんばりこそが彼女の作品の最大の魅力だろう。読んだあとに、思わず自分ならどうするだろうか、と考えてしまった。

初版は二〇〇四にメディアワークスの「第二〇回電撃大賞」受賞作として電撃文庫から出版された。今年六月、大幅に改稿した上、番外編として短編四篇を加筆し、ハードカバー単行本が出た。是非、読んでみて欲しい一冊である。
（日三年 矢島陽南子）

★『ぼくらは虚空に夜を視る』 上遠野浩平著 徳間デュアル文庫

所蔵なし 発注中

私たちが暮らしている今の生活が、実はかりそめのもので、私たちの本体は宇宙船のカプセルの中で夢を見続けているだけの存在だとしたら……。そしてある日、その眠り続ける人々を守るために謎の異星人と戦う戦士に選ばれてしまったら……。

まるで映画『マトリックス』のようだが、主人公は世界を守るなどという現実味のないことよりも、クラス内で自分が浮いていることや、ちょっとしたイジメにあっていること、幼馴染の女の子との微妙な距離に頭を悩ませている。SF的な世界を舞台に、思春期の少年の心理を綿密に追うこの作品は、やや懐古的な雰囲気があり、ライトノベルというよりは、ジュブナイル小説といったほうがしっくりする。自分にとつては現実としか思えない仮想世界、宇宙空間の広大さと孤独感。ラスト数ページはまさに圧巻であった。
（日三年 丹澤佑希）

★『ブギーポップは笑わない』 上遠野浩平 メディアワークス 電撃文庫

所蔵なし 発注中

この本は上遠野浩平の小説『ブギーポップシリーズ』の第一作目であり、「第四回電撃ゲーム小説大賞」受賞作品である。

私は、主人公たちと同世代の、高校生のときに当時所属していた部活の先輩に勧めら

れて、この本を読んだ。この作品は、各章ごとに登場人物の中の一人の視点で物語りが進んでいくため、当然、そのキャラクターの知りえない情報は、その章には出てこず、全ての章を読み終わったとき、物語の全体がわかるという、大変面白い構成になっている。

タイトルロールのブギーポップ（「不気味な泡」の意）は、主人公である宮下藤花の二つ目の人格である。しかし普段は全く姿を現さず、世界を脅かすものが現れたときだけ、泡のように浮かびあがって活動し始める。

敵は、高校の中に入り込み一見普通に見えて実は特殊な力をもつ少年を味方につけ、世界を支配しようとする。それに立ち向かうのは、ごく平凡な高校生たちだ。ブギーポップはじめ、人外の戦力の助けはあっても、世界の脅威にとどめを刺すのは高校一年生の男の子なのである。凄惨で異常な事件が続く中、それでも少年少女は淡い恋心を抱き、繊細に心を揺らす。それは不気味であると同時に美しくもある。

この物語の中には名前だけしか登場しないが、重要な役割を果たす小説家、霧間誠一の言葉が印象的である。

「普通というのはそのまま放っておいたらずーっとそのままと言うことだ。だから、それが嫌なら、どこかで普通でなくならなければならない」

普通ってなんだろう。私はそんなことをふと考えた。『ブギーポップは笑わない』は意味深長な作品である。
（日三年 酒井春奈）

● 紹介 私の好きな児童文学・第八回 ●
★『三國志演義』羅貫中 著 井波律子 訳 ちくま文庫

請求記号 キ219.127 資料番号 103020870

有名すぎて特に紹介も必要ないかもしれないが、中国明代に成立した通俗歴史小説で、『水滸伝』『金瓶梅』『西遊記』と並ぶ四大奇書の一つである。日本では陳寿の書いた歴史書である正史『三國志』と混同されることがままあるが、『三國演義』または『三國志通俗演義』が正式名称である。日本では『三國志演義』とされることが多い。この本は

大勢の講釈師によって語られた説話（語り物）が羅貫中（施耐庵とも）によってまとめられたものだ。中国の伝統的な価値観では、文学とは歴史書や詩文のことであり、小説は知識人の読み物ではなかった。が、『三国志演義』と『水滸伝』は、例外的に知識人の蔵書目録に入っていることが多い。語り物を集大成するにあたり、羅貫中は荒唐無稽なところを減らし、史実に基づいた記述を増やしたり、様々な工夫をしたからだろう。

時は後漢末（西暦一八〇年頃）、朝廷は機能不全に陥り、全国に軍閥や盜賊団が割拠していた。中でも、都にあつて皇帝にとつて変わらうとする曹操と、穀倉地帯である長江下流域を基盤とする孫権は、着々と力をつけていた。そこへ漢帝室の流れを汲む劉備が、義兄弟の関羽、張飛を従え、智謀の士、諸葛亮を軍師に招き、混乱を極める時代を平定しようと立ち上る。以後、北方は魏の国の曹操、南方は呉の国の孫権、西方は蜀の国の劉備と三国に分かれ覇権を争うことになる。後漢末の混乱から三国時代を経て晋の統一までの百年余を書く歴史ロマンである。

中国国内はもちろん、アジア各国で世紀を超えて親しまれてきたこの本は、日本でも様々なバージョンが出版されメディアミックスも盛んに行われるなど、たくさんの愛好者を生み出している。

私は吉川英治版の『三国志』が一番好きだ。もちろんこれも正史『三国志』の翻訳ではなく、『三国演義』をベースにした小説である。

この本に出会ったのは、中学生の頃だった。どんなきつかけでこの本を買ったのかは覚えていないが、中学、高校時代を通して、私の一番の愛読書であった。まず、吉川英治の文体が非常に好きだった。淡々としていて上品で、中国が舞台なのに和ものの雰囲気があり、知的で物静かな常識人らしい著者の人柄がにじみ出ている。

吉川は、前半を劉備、後半は諸葛亮の活躍を中心に描いているが、私は仙人のような諸葛亮が大好きだった。史実では、実直な政治家ではあるが戦下手で、蜀の国の滅亡を早めた張本人ときえ言われる彼だが、正史『三国志』以外では大活躍だ。天に祈って風を呼んだり、人の死期を予知したり、彼がしていないのは、もはや空を飛ぶことだけ、現在世にあるファンタジー小説に書かれている魔法のほとんどは、すでに諸葛亮がやっ

ているといっても過言ではない。

私が中国に興味を持つきっかけになったのはパール・バックの『大地』だったが、吉川版『三国志』を皮切りに、『聊齋志異』『剪灯新話』『三言二拍』などの白話小説（口語で書かれた小説）にどんどん惹かれていった。

大学は外国語学部中国語学科だった。が、入った大学には文学部がなく、ひたすら語学の毎日、漢詩や『史記』や『老子』等を学べると思っていた私は大いにつかりしたものだ。

それでも、大学時代は楽しかった。始めて中国に短期留学したのは大学三年のときのことだが、見るもの聞くものすべてが珍しく、広大な天安門広場、路地裏の柳の木、人々の無愛想さまでもが、「おお！中国！」といちいち私を感動させた。

私の脳は生まれつき左右がよくわからない。それなのに一人歩きが好きだったから、よく迷った。そして片言の中国語で道を聞き、さらに迷う。言葉もままならぬ外国の、知らない街で迷子になることはもちろん不安だった。が、歩いていけばいずれ着く、着いてしまうのだ、という樂觀ともあきらめともつかぬ気持ちにもなった。

その辻をどちらに曲がるのか、悩んで立ち止まった私の脇を、猛烈な排気ガスを噴出しながら、車が恐ろしい勢いで通り過ぎていく。それは私に、時代を走りぬける英雄の影で、誰に顧みられることなく生き、死んでいく平凡な民衆、お前もその一人なのだ、といっているような気がした。私は子どもっぽい全能感から脱却し、大人へと変化する端緒を、中国の街角でつかんだのだ。けれども、そこにあったのは自分が特別な人間ではなかったという絶望ではない。長い歴史の先に私が存在し、私の死後にも長い歴史が続いていくのだという、時の流れを幻視したような高揚感だった。それは単なる「ランナイズ・ハイ」だったかもしれないし、あるいは殺人的な排気ガスによる酸欠妄想かもしれない。が、いずれにせよ私は『三国志』に夢中になり、まるで浦島太郎のように過ぎた。読書するたった数日のうちに、後漢の滅亡、三国の鼎立、そして晋の統一という、百年が過ぎたのだ。

しかし敗るるや、急激だった。四世五十二年にわたる呉の国業も、孫璋が半生の暴政によって一朝に滅んだ。——陸路を船路を、北から南へと駿駿と犯し来れるものすべてそれは新しき国の名を持つ晋の旗であった。

三国は晋一国となった。

『松に古今の色無シ』相響き相奏で寂然と醒めきたれば、古往今来すべて一色、この輪廻と春秋の外ではあり得ない。

という最後の一文に『三国志』の真髓があらわされている。この物語の真の主演は時の流れなのだ。

若く感性の柔らかなうちには是非読んでおいて欲しい一冊である。

(図書館 鈴木)

●おしらせ●

★大学祭企画 梨木香歩さん朗読会『家守綺譚』を中心に朗読とお話し

日時 二〇〇七年一月四日(日) 一三時二五分〜一四時四五分

場所 緑園キャンパス グリーンホール

入場料 無料(予約不要、誰でも自由に参加できます)

梨木果歩さんプロフィール 一九五九年生まれ。鹿児島県出身。主な作品は『家守綺譚』『西の魔女が死んだ』『裏庭』『沼地のある森を抜けて』『エンジェルエンジェル エンジェル』『春になったら莓を摘みに』『べるりのこと』『水辺にて』『ほか

★第三回創作コンクール作品募集

募集ジャンル 詩・小説・戯曲

応募資格 本学学生・院生・科目等履修生

応募メ 切 二〇〇七年二月三日(月) 一七:〇〇

結果発表 二〇〇八年一月一六日(水) 緑園図書館四階館長室

賞と賞金 第一席：二万円分 / 次席：一万円分

第三席：五千円分 / 応募賞：三千円分の図書カード

★大学祭企画 ザ・表現！ 作品募集

読書運動プロジェクトの今年度テーマを念頭に置き、児童文学を読んで考えたこと、イメージしたことを好きな形で表現してください。公序良俗に反しない限り、何をするのも自由です。応募作は全て大学祭のときに図書館内で発表します。

募集作品例 マンガ、小説、エッセイ、評論、作詞、作曲、絵画、立体作品、写真、戯曲、ダンス、パフォーマンス他(どんなものでも可)

真、戯曲、ダンス、パフォーマンス他(どんなものでも可)

応募資格 本学学生、院生、科目等履修生(団体での応募可)

応募メ 切 二〇〇七年一月一〇日(水)

発表表 大学祭にて緑園図書館で発表。応募多数の場合は審査あり。

賞品 応募者全員：千円分の図書カード

*二件とも、学内掲示ポスター、応募用紙(図書館で配布)を真読の上応募してください。

●おわりに●

いかがでしたか。一言でライトノベル、と言っても、その内容は多岐にわたっています。SFやファンタジーの味付けをしたものばかりでなく、現実世界を舞台にした学園ものや恋愛もの、冒険もの、ミステリーなど角得でしたら切りがありません。

少し前までは、これらの一群の本の特徴は、手軽に読めて面白いが、内容はそう深くなく、文章もあまり上手くない、というものでした。が、最近ではライトノベルのレーベルから出版される作品にも、本格ミステリーや、人生の深淵を覗き込むような恋愛もの、それが架空の国の出来事だとは思えないほど精緻な歴史ファンタジーなどが多く現れるようになりました。これほど多くのライトノベルが出版されている今日、手軽に読み捨てられるような作品では、作家も出版社も生き残っていけないということなのでしよう。ときはまさに読書の秋。堅く分厚い純文学だけでなく、ライトノベルで新しい世界を開拓して見てください。

(日文三年 矢島陽南子)